

相応しい結果
伽藍堂

それはその日に突然だった。おれはその日虫の居所が悪かったみたいで、見下ろしてくるような街灯が何故だか我慢ならなくなつた。そんな理由にもならない理由で街灯を蹴つ飛ばしたんだけど、結果本当に言葉どおりに蹴つ飛ばすことになつてしまった。最初は何が起こつたのか分からなかつた。大きな音と共に電灯が無くなつたんだから。数秒後にまた大きな音がしたから近くの街灯の灯りを頼りに目を凝らして見てみると街灯のあつた場所には街灯の根元しか残つていなかった。急いで大きな音のした方へ走つて見に行くとアパートの壁に電灯が突き刺さつていた。その音で近所の人が集まつてきていて、おれは自分のせいかもしれないやでもそんなことはあるものかと思ひながら恐くなつたので帰つて寝た。

その次の朝にもまた一つだ。おれはワンルームのマンションに一人暮らししなだけけれども、一人暮らしの男にしてはマメに家事をやる方なんじゃないかと思う。当然朝食も毎日作るんだけど、みそ汁用の人参を切つているときに誤つて手を切つてしまった。ところがだ、結構ざつくりと包丁で切れそうな感じだったけ

れど実際はすうと少し赤い筋が浮かんだだけで本当に血が少し滲む程度だった。それだけなら単に包丁の切れ味が悪かっただけじゃないのかとなるのだけれど、おれが本当に驚いたのはその後だった。確かに浅い傷だったんだけど、見ている数秒のうちに傷口がふさがり跡形も無くなってしまったのだ。しばらく驚いた後、昨晚のことを思い出したおれは恐る恐る包丁の刃の両端をつまんで力を加えてみた。するとどうだろう、さつきまで使っていたはずの包丁がまるで粘土みたいにぐにやりと曲がってしまった。しばらく呆然とした後に気付いた。なんてことだ、おれはまだ朝飯を作っている途中だったんだ。おれは仕方無く冷蔵庫に入っていた佃煮とご飯だけで朝食を済ませた。

家を出て駅に向かいながらおれは昨日から自分の身体に起きている異変について考えていた。今朝のことを鑑みるにあれば偶然起きた出来事ではなくて実際におれの身体には何らかの変化が起こっている。おれは一体全体どうなってしまったのだろうか。そして歩いていると昨晚街灯が刺さったアパートの前を通りがあった。朝っぱらから少し人だかりが出来ている。あ

れはやはり本当に起こったのだろうか。そんな疑問がわいたおれは野次馬に混じることにした。

「何かあつたんですか」

おれは横にいたオヤジに聞いた。

「何でもなあ、昨日の晩に向こうにあつた電灯がこのアパートの壁に突き立てられたんだと。きつとこのアパートの奴が何か揉め事起こして、ヤクザが報復にわざわざ電灯折つて持つて来たに違いねえ。恐え世の中だ」

オヤジは自分の見解を述べるとまたアパートの壁をもつとよく見ようと人の隙間に押し入った。やつぱりあれはおれが蹴つ飛ばしたんだろうな。おれはそう思った。そうしてアパートの前で時間を食つてしまつたようで、時計を見ると走つても電車に間に合いそうに無い時間である。ああおれの馬鹿野郎また課長に愚痴愚痴と小言を言われるないやだなあと思ひながら走り出すと妙に身体が軽い。いや軽いなんてもんじゃない。おれはどんどん加速していく。どんどんどんどんだ。まるで自動車のように加速し、気付けばもう駅に着いていた。だが電光板を見ると乗るべき電車はつきつき出ってしまったようだ。おれはやばい遅刻するそ

れはいやだと思いながらさつきさんの走り思い出し、次の駅まで走ることにした。さつきと同じだ。加速はどんどん進み横の自動車を追い越していく。どんどんどんどん速くなる。そして線路を走る電車を追い越してしまつたおれは結局次の駅で無事電車に乗ることが出来た。でもおれは全く息を切らしてはいなかった。

会社に定刻どおり出勤し午前中の仕事を終えたおれは昼食を摂りながら考え事をしていた。おれは異変が起きてから初めて落ち着いて異変について考えることとした。どうやらおれは電灯をふつとぼし包丁をひん曲げる怪力、包丁であまり傷つかない頑丈さに傷がすぐにつく治癒力、そして電車をも追い越す走力を身につけたらしい。ということはある、何てことだ。おれは突然変異とかそういう類のことになつてしまつたんじゃないだろうか。普通に人間が生きていてこんなことになるなんて少なくともおれの聞いた限りでは無いはずだ。じゃあおれはいわゆるミュータントつて存在なのだろうか。どうしておれがそんなことになるんだ。最近変なものを食つただろうか。いやでもおれは食べるものは普通にスーパーで買った食材を普通に調

理して食うぐらいで変わったものは食べていない。今食べているものだってコンビニで買った普通の弁当だ。いやしかし、これは普通の弁当だ、確かに。普通にコンビニで販売されている。でもよくよく考えてみればおれはこれがどこで作られて何で出来ているのか全く知らない。そりゃあ原材料名は書いてあるけれども本当だか分かったもんじゃやない。それに書いてあってもなんのことだか分からない原材料だって入っている。それに食べるものだけじゃない。今おれが飲んでいる炭酸飲料だって何で出来ているのか全然分からんじやないか。ああそう考えると家でお茶やみそ汁に使っている水道水だってどんな処理をされているのかおれは知らない。普通は知っているのかも知れんが少なくともおれは知らない。それに日々普通に吸っている空気だっておれの吸わない煙草の煙や車のガスやあとおれの知らない所にある工場の煙や何が混じってるのかさうでないのかおれは知らない。家電やテレビから出ている電磁波や携帯から出ている電波やトイレにおいてある芳香剤や何やら何までおれはどんなものか分からんのに使っているのだ。もしかするとこんな風に変異

を誘う物質が計画的に社会のありとあらゆるものに使われていられるのかもしれない。じゃあそれに抗えず変異をこうむりこんな身体になってしまったおれはどうすりゃいいんだ。家電も携帯も駄目、食べ物も駄目、水も駄目、空気も駄目じゃおれは、いや生命は生きていけないじゃないか。ああおれはどうしたらいいんだと考えて気分が悪くなったおれは会社を早退した。

本当に気分が悪くなつてどうしようもなくなつたおれは病院へ向かうことにした。病院で何科を選べばいいか分からなかつたおれはとりあえず内科を選んでおいた。しばらくの間待たされた後おれの番が来た。診察室に入るとおれは昨夜からの出来事を医者に洗いざらい話してついでにさっきの昼の考えてたことを話してつまりおれは気分が悪いのですと伝えた。すると医者はおれしそくに話した。

「いや、本当に良かった。あなたは運がいい。あなたが罹^{かか}つたのは USDm と呼ばれている病気です。これは進行すると治らないのですが、まだ発症して一日も経っていないとのことですので薬物投与で完全に治癒します。いやあ、早めに受診されて本当に良かった」

おれのように早めに受診するやつはまれなのだろうか。でも治癒するとの言葉でおれも不安が消えてうれしくなった。

「この病気が進行して重くなったらどうなりますか。死にますか」

楽になったので疑問に思ったことを聞いてみた。

「いや、死ぬことは無い。でも死ぬよりも辛いかもしれない。症状が重くなると、君に出ていたような症状に加えて、高速飛行、瞬間移動、透視、念力、腕から光線を発射など挙げればキリが無いほどの症状が出る。君は早い決断のおかげでこれからも健康な人間として生きられるんだ。よかったなあ、本当に良かった」

医者はぼろぼろと涙を流した。

「ありがとうございます。今日先生に見てもらわなければどうなっていたことか。泣くのはおれのほうですよ。ほんとうに、ほんとうにありがとうございます」

おれも涙をぼろぼろと流しながらしばし先生と抱き合った。おれは先生に薬剤の注射を受け、しばらく安静にした後に先生に礼を言ってから病院を去った。帰り道、おれを見下ろしてきやがる電灯があったので、

思いつきり蹴飛ばしてみた。死ぬほど足が痛くて、おれは幸せな気分になった。

了

相応しい結果

初出 『混凝土の隙間と奇譚集』 2008年12月30日 発表

2010年5月9日 公開

著者 伽藍堂

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。